

## 「でんきで創る 夢・未来」

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年 久保 葉月

2011年3月11日。未曾有の大震災が東北地方を襲った。当時中学一年生の私は自宅にて祖母と二人でテレビを見ながらゆっくりしていた。それは今までに体験した事が無い大きな地震だった。地震もおさまり外に出ると地面のタイルは剥がれ、コンビニエンスストアの店内は商品が棚から全て落ち、皆が落ち着きを保てない状態だった。マンションに住んでいる私は地震を通して電気のありがたさを感じる事になった。セキリュティーの為のドアのロック、自動ドア、エレベーター、電気の下からくみ上げている水、暖房、そして部屋を灯す電気。ありがたさを痛感するとともにふと空を見上げると都会では今までみた事の無い数の星たちが私たちを照らしていた。あの星空は今でも目に焼き付いている。私たちは電気がある暮らしが「当たり前」になっていたのだ。もともとある小さな幸せに気づけていなかったのだ。

時は過ぎ2015年、私はアメリカ、アイダホ州にて約1年間の高校留学生活を送っている。1年間、親元を離れ私は3つの家族と過ごしてきた。1つ目の家族は家族全員では食事をせず毎日が自炊での生活だった。日本に居る頃、看護師として働いている母はどんなに忙しくても毎日私に料理を作ってくれ、保育園のころから今に至るまで毎日早起きしてお弁当を持たせてくれていた。「当たり前」が「当たり前」ではない事を初めて知った。学校からの帰り道、家に明かりが灯されている。そんなことが心のどこかで小さな幸せだった。灯された電気の下、家族全員が一緒にご飯を食べ、その日一日の出来事を共有する。こんなちっぽけだけど難しい幸せこそが「でんきで創る 夢・未来」だと私は思う。